

AR  
CA  
DIA

78  
SPRING 2019

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



  
OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽②⑦ 花と鳥のかたち

館長 神原悟

信春の蟻と蝶

『藤原為忠集』に載る鶯や鳥、鶉、鶴、尾長鳥、鶺鴒など十二種の鳥たちを詠んだ歌十三首(鶴は二首)こそが、それである。そのうちの二首、鳥と鶺鴒分を掲げると、

村鳥たそがれどきにうちつれて

いそぐ羽なみは遠の山もと

夜ふけぬ時もおもへばとほ山の

鐘よりさきにつぐる庭鳥

とある。いずれも見慣れた光景を詠んだもので、時刻を告げる鶺鴒や、夕暮れどき三々五々時に帰る鳥を歌い、どこか童謡のような懐かしささえあるだろう。

ところがこれら十三首は、その前書(詞書)に、

あるとき、松公のきたのかたよりも、唐の絵を此くにの絵師にうつさせ侍る、翅のたぐひをおこせて、和歌をくはへよとのぞみしか

とあるように題詠であったようで、絵に描かれた鳥たちを詠んだという。歌数からすれば、歌は屏風歌、おそらく絵は屏風二帖、各扇に二図宛て貼付されたものとみてよいだろう。しかもその絵は、なんと「唐の絵」を写したものであった。となると、それがどのような絵であったのか。掲出した歌からはちよつと想像することさえ難しいのだが、例えば鶴を詠んだ一首、

絵にかきし庭の洲浜の鶴をみて

とひていぬべき思ひげもなし

などからは、既に本連載「花鳥の変」(眼の極楽②⑥)で述べた漢・文帝の上林苑(『帝鑑図説』のうち「不用利口図」)を思わせる庭園図であっただろうか。その絵は、ゆつたりと鶴が歩み、牡丹が咲き誇る、が故に蝶も舞うーそんな図柄を想定できるのかも知れない。まさしく花鳥図である。それが、「唐の絵」を写させたものだというのである。

つまり平安から鎌倉時代、宋代花鳥図が輸入され、しかもそれが確かに模写されてい

## ESSAY

た(宮島新「薯」肖像画『日本歴史叢書 吉川弘文館 一九九四年』)。これに『延善式』が伝える「鷹草木之類」五尺屏風のことを考え併せれば、当代花鳥画の制作が、模写も含め、唐絵花鳥画を契機としていた、とみるのも不可能ではあるまい。もとより『後白河法皇像』の画中障子の蝶も尾長鳥も、そうして描かれたはずだ。

では蝶以外の虫たちも、そこに描かれていたのだろうか。舶載された宋代花鳥画の実際が分からない以上、判断は難しいが、それ程多く描かれていたとは思わない。王朝人の眼が、秋に鳴く虫や夏の蟬以外、広く虫たちに向けられることはなかつたからである。

とはいえ虫たちが全く取り上げられなかつたわけではない。「涅槃図」には釈尊の死を悼む生きとし生けるものの二つとして、百足や蜂、蝶、蜻蛉、蝸牛などが登場しているし、『地獄草紙』(奈良国立博物館蔵)には亡者たちを苛む化物たちの針口虫(屎糞所)や最猛勝(膿血所)が、蛆や蜂をイメージソースに描かれているではないか。だがそれらの描写は、あくまで経説からの要請に基づくもので、特に虫そのものに対する関心の高まりがあつたわけではない。

となると日本絵画史が、虫たちを本格的に描き出したのは、何時であったのだろうか。「蜻蛉飛び、虫の声を聞く」(眼の極楽②④)「江戸の花園」(同②⑤)を写した、抱二の「十二月月花鳥図」の出現まで俟たねばならなかつたのか。

いや、それより遙か以前、室町時代末期には、すでに虫たちの姿を鮮やかに表した作品があつた。長谷川等伯(二五三九〜一六〇)が「信春」と名乗った時期の、おそらく三十代後半の作「恵比寿大黒・草虫図」三幅対(京都国立博物館蔵)の左右幅である。芍薬、萱草を主たるモチーフとする。その右幅「芍薬図」には胡蝶と蟻が、左幅「萱草図」には尉鶉と虻(蜜蜂とも)とが写されている。

その内できりわけ注目したいのが、芍薬の茎、葉、花卉の上を這い回る蟻である。十五匹も数える。蟻と云えば『天稚彦草紙絵巻』(土佐広周筆、ベルリン東洋美術館蔵)に登場する蟻が思い出されるが、こちらは、天稚彦の父の鬼から、倉に収められた千穀の米を、一粒もこぼさず、別の倉へ運ぶよう難題を課せられた姫君を救うべく現れた蟻が描か

れるが、描写は概念的で、もとより物語からの要請で描かれたもの。

一方、信春の蟻は、茎を登るもの、葉陰から頭部を出すものなど、ヒコヒコと動かす触覚の角度や頭部、胴部のつながりに変化をつけ、さまざまな姿態に描き分ける。その背景に信春の蟻の生態に対する観察と、それに基づく写生があつたことは疑いない。

山蟻のあからさまなり白牡丹

牡丹吟に名句の多い蕪村だが、これもその一つ。白牡丹を白芍薬に換えれば、右幅の「芍薬図」となるのだが、信春の蟻を見つめる眼は、この蕪村のそれに近いと思うのだが、どうだろう。

だがこうした虫への視線を、信春(等伯)が自らの力で獲得したとは考えにくい。というのも信春時代の等伯は、故郷七尾で絵仏師として仏画制作に勤しんでいたはずで、そもそもこの三福対のような鑑賞的花鳥画を描くことさえ無かつたからである。信春がこうした花鳥画を制作するのは上洛を果たした後とみられ、短期間の学習でその制作に習熟できたことは、この三福対の完成度の高さを見れば分かる。硬質だが伸びやかな描線、清々しい彩色、群を抜く出来映えを示す。信春に天賦の才あればこそである。

となると信春が京洛で学んだ花鳥画は、一体、どのような作であつたのか。まずは当代画壇を指導した狩野派の花鳥画に学ぶ―常識的にはそうであろう。その花鳥画は、元信の「花鳥の変」後のそれであつたはずで、華麗な彩色を伴い、取上げる花鳥も、牡丹や孔雀など珍奇で豪華な、いわば漢にまつわる「唐めきたる」ものであつたに違いない。三福対に描かれたのが、芍薬や萱草であつたのも、牡丹とともに「唐めきたる」草花であつたからで信春花鳥画の出自を物語る。

いや、さらに信春の狩野派花鳥画の学習を証左する作例があつた。しかもこの場合には、影響を与えた作品さえも特定できる。そこから信春の京洛における動向を知る手掛りを得ることもできるはずだ。そんな興味深い作品とは、『花鳥図屏風』(岡山・妙覚寺藏)こそが、それである。六曲一隻、二屏風の左隻に当たる。幹枝を屈折させる白梅の巨木が描かれている。その右方に鋭く伸びた枝先に鶺鴒が翔ぶ。竹、薔薇、鴛鴦などに散らされた濃彩が実に効果的、清新清雅の味わいに富む。信春花鳥図最高最大の作であるが、従来これについては、白梅の複雑な枝ぶりや鋭利な描線などから雪舟風、なかでも等春の画風を踏襲したものと見ることで衆目一致、ほぼ定説化したとも云えるだろう。と

## ESSAY

云うのも、そう見ることで、後に等伯自身が自らを称して「白雪舟五代」と標榜したことも整合するからである。

だが本当にそうなのだろうか。妙覚寺本を雪舟・等春風と云うのなら、むしろ永徳風、と云うよりさらに一步進めて、もうほとんど大徳寺聚光院「花鳥図襖」(聚光院方丈室中東側襖)の直模的作品と云うべきだと思う。影響を与えた作品が特定できると述べたのは、この作を指す。左右反転しているが、妙覚寺本の梅の枝振り、そのあしらいとかたちは、基本的に聚光院本のそれを踏襲する。横方向へ大きく伸ばした枝の先端、その先に急上昇と急降下との違いはあるものの、鶺鴒が空を切り裂くように翔ぶのも同じだ。そう云えば梅樹に竹、鴛鴦など、二図を構成する主要モチーフも同じだし、竹幹に至っては交差するかたちも一致する。先学たちが、見れば分かる程度の、両者のこうした相似性に、どうして気が付かなかつたのか、訝しくさえある(唯一、両者の相似性を指摘したのは佐々木千春氏。論拠は異なるが、分析そのものは多としたい。佐々木千春「長谷川信春についての一考察」妙覚寺花鳥図屏風を機軸として『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四七輯第三分冊 二〇〇二年)。等伯の「白雪舟五代」と標榜したが、先学たちの等伯(信春)作品を見る眼に、分厚いフィルターをかけてしまった、としか思えない。

その聚光院室中「花鳥図襖」の制作年代、かつては永禄九年(一五六六)永徳二四歳の作とみなされてきたが、近年では天正十一年(一五八三)説が出るなど(渡邊雄二「聚光院方丈襖絵成立についての一考察」『美術史』二四四号 一九九八年)、なお確定をみていない。だが、いづれにせよこの時期の等伯はまだまだ信春時代で、現時点で等伯号の使用が確かめられるのは、天正十七年の大徳寺三門壁画の「長谷川等白五十一歳筆」の落款であることから、もし聚光院画の制作が天正十二年と認められるならば、妙覚寺本の制作はこれ以降、天正十七年までの間と押さえることができるだろう。

だがそのことよりも差し当たり重要なのは、これによつて京洛における信春の動向を知る一端が得られる点である。言うまでもない、信春が大徳寺聚光院に出入りしていたという事実である。それも室中の襖絵を親しく観察し、写すまでに。寺側との仲介の労をとつてくれる人物がいたのだろう。或いは制作なった永徳の襖絵が、京童の話題となつていたのかも知れない。それを見てみたい――京洛で「旗揚げるべく上洛した信春であつてみれば、当然の願望である。(未完 図版は次号で)

チェコ国立プラハ工芸美術館の収蔵品を中心として、幅広い魅力を持つチェコの文化をデザインの視点からたどる本展覧会について、チェコの近現代デザインの特徴とそれが生み出された背景について紹介します。

二十世紀の初頭、チェコではヨーロッパ芸術の近代化を希求する前衛芸術運動（アヴァンギャルド）の最初の潮流であるキュビズムが取り入れられます。パリでピカソやブラックにより創始され、対象を様々な角度からとらえて抽象化した多面体で描く二次元表現を特徴としますが、チェコ・キュビズムでは、結晶体や幾何学的形態を建築やインテリアなどの分野にわたる立体物にまで応用したことで、他に類を見ない独特の芸術的発展を遂げました。ウィーンで近代建築の理念を説いたオットー・ワグナーに学んだパヴェル・ヤナーク、ヨゼフ・ゴチャール、ヨゼフ・ホホルは、一九二二年にプラハでキュビストの作家たちと造形芸術家グループ（スクピナ）を結成し、鋭角的で幾何学的で斬新な建築を古い街並みに出現させました。同時にインテリアも手がけ、多角形と多面体で構成された家具や照明（図1）、陶器（表紙）によりキュビズムでデザインされた空間を創り出しました。



図1 パヴェル・ヤナーク《テーブルランプ》1913年

先鋭的で複雑な形は、チェコの伝統的な技術により具現化されたものです。

第一次世界大戦後の一九一八年に、オーストリア＝ハンガリー帝国からチェコスロヴァキア共和国が独立すると、民族的意匠の円やアーチを用いるロンド・キュビズムとして新しい時代とチェコの民族文化を反映する様式へと展開しました。

その後、現代までチェコは社会的・政治的に劇的な変化を繰り返しますが、次々と訪れる新しい文化や社会の課題にも応じて、それぞれの時代にチェコとしてのデザインを生み出してきました。

一九三〇年代前半には、工業化され大量生産が可能となった現代社会においてすべての人が快適に暮らすため、シンプルなかたちと機能性を第一とする機能主義がデザインの主流となりました。アーツアンドクラフツ協会に所属しグラフィックデザインや博覧会の展示などでも幅広く活躍した「クラスナー・イズバ

## EXHIBITION

（美しい部屋）のラジスラフ・ストナルが中心となって実用デザインの基盤を作り、展覧会やカタログによりライフスタイルの提案もしました。耐熱ガラス（77号P 4 図1）やステンレスなど新しい素材と技術が用いられ、シンプルで多機能ながら美しい普遍性をもつデザインの製品が普及していきました。

一九四八年以降の共産党政権の時代、社会主義リアリズムにより地域の民族モチーフが奨励されました。五〇年代半ばから芸術へは規制緩和され、国外のシュルレアリスムなどの自由な芸術様式にも刺激されたピンクや薄緑色のやわらかな色や、革新的なプラスチック素材が用いられました。一八五八年のブリュッセル万国博覧会に出展された軽やかで洗練されたデザインは「ブリュッセル・スタイル」と呼ばれ、六〇年代まで創作されました。（図2）

また、チェコの絵本やおもちゃは、芸術家が関わり自然を独特の色で描き、時代を超えた良質なデザインのもものが多く、子供への温かなまなざしが感じられます。どの時代にも、多くの文化に触れながらもチェコの歴史と文化、そして日常生活を大切に創られてきたチェコならではのデザインの魅力が感じられます。



図2 ヤロスラフ・エイジェク、コーヒーセット《ダグマル》1960年

図1、2とも：チェコ国立プラハ工芸美術館蔵 Collection of The Museum of Decorative Arts in Prague

企画展

# チェコ・デザイン 100年の旅

小幡早苗

会期：平成31年4月6日（土）～5月19日（日）

# 琉球の美

湯谷 翔悟



赤地龍瑞雲嶮山文様繡珍唐御衣裳(国宝 琉球国王尚家関係資料)那覇市歴史博物館蔵

国宝が、来ます。  
沖縄から、来ます。

この展覧会は、「国宝 琉球国王尚家関係資料」をはじめ、沖縄県内の美術館・博物館が所蔵する琉球漆器の優品と、日本有数のコレクションを誇る松坂屋の紅型衣裳びんがたとおして、琉球の自然と歴史の中で生み出された美と文化の粋を紹介していくものです。

東シナ海に位置する琉球は国際交易の拠点として栄えました。一四二九年に中山王尚巴志が琉球を統一しましたが、一四七〇年には尚円が政変により新たに王朝を成立させました。この尚円にはじまる第二尚氏の王朝は、その後明治初年の琉球処分によって日本に組み込まれるまで、四〇〇年の長きにわたって琉球を統治してきました。この国王家に伝わった資料の一群が、今回特別出品の運びとなった「国宝 琉球国王尚家関係資料」です。この琉球王国の象徴的な資料からは、琉球という国の姿が見えてきます。《赤地龍瑞雲嶮山文様繡珍唐御衣裳》は琉球国王の正装衣裳で、中国の清朝皇帝から贈られた反物を使用し、中国の冠服の形式を元に琉球で製作された衣裳です。古来より琉球は海を介して

## EXHIBITION

異国と交流していましたが、特に中国を主君とする冊封関係を築いていました。この中国風の正装からは、中国と琉球の深い繋がりがうかがえます。その一方でこの衣裳の背面には房を施すなど、琉球独自の仕立てがなされています。この衣裳にもみられるように、琉球の文化は、異文化を巧みに取り入れつつ、独自の文化を醸成していくことが特徴といえます。そしてその文化的特徴は、琉球で発展を遂げた工芸品にも大きな影響を与えました。

琉球の漆芸品は王国内の儀礼や生活に用いられるとともに、献上品・交易品として他国に移出され、琉球王国の発展を支える主要な産業でした。その技法や意匠は主に中国からもたらされたものでした。琉球は多様な技法を組み合わせた洗練化することによって独自の美を生み出しています。また、一六〇九年に薩摩が侵攻して以降は日本の嗜好に合わせた漆器が多く生産されるなど、琉球漆器は琉球を取り巻く地理的環境や歴史までも映し出しています。

琉球の染色品である紅型は、異文化の影響がさらに顕著です。紅型の染色には中国から輸入された原料が多く

使われており、また文様には松や桜など、日本的な意匠が多く見られ、ここでも周辺諸国との交流がうかがえます。それにもかかわらず、紅型がもつ華やかな彩色は、現代の私たちに「琉球(沖縄)らしい」と感じさせる、独自の美を表現しています。また紅型に用いられる色や文様は階級によって定められており、紅型もまた気候風土や歴史を、その美の中に内包しているといえるでしょう。

平成が終わりを迎える今年には、廃藩置県により沖縄県が設置されてから一四〇年の節目の年でもあります。第二尚氏の王朝が存続したのは、いわゆる「日本史」の時代区分では戦国から明治の初めまでと、非常に長い年月に及びます。琉球で育まれた工芸の美をおして、その固有の歴史と文化に思いを馳せていただけたら幸いです。

会期：2019年6月1日(土)～7月15日(月・祝)

## 平成三〇年度の収集作品について

浦野加穂子

当館では毎年様々な博物資料、美術品を収集しています。今年度収集した主な作品をご紹介します。

### 【購入】

#### 「樹下孔雀蒔絵螺鈿洋筆筒」

十七世紀初頭に製作され、ヨーロッパに輸出された南蛮漆器です。前面に前倒しの扉一枚を取り付け、内部に大小の抽斗ひきだしを納めており、筆筒の外面と抽斗正面には萩・桔梗、紅葉等の草木と孔雀などエキゾチックな画題を取り合わせた意匠を、蒔絵と螺鈿で表しています。当館の収集コンセプトの一つである「家康の生きた時代」の桃山から江戸時代初期の東西交流を如実に示す資料です。

### 【寄附】

#### 「染付竹図鉢」

江戸時代後期に三河で活躍した岡崎生まれの俳人、鶴田卓池が竹の図を絵付した鉢です。卓池は書画を多く手掛けましたが、陶磁器の絵付けは珍しく、制作活動の幅を知る上で貴重な資料です。

#### 「志賀重昂漢詩・書簡」

世界的な地理学者として岡崎市名誉市民に叙されている志賀重昂の漢詩と書簡です。再応召進講と記さ

れた七言絶句の漢詩は、大正十三年（一九二四）に志賀が中東情勢について、天皇や皇族に御進講をした事を讀んだ志賀晩年の作と推測されます。

### 【寄託】

#### 「熊毛兜」

下三ツ木町の観音寺に伝来する兜で、三木松平氏初代の松平信孝の所用と伝えられています。兜の表に熊毛を付け、吹返しには家紋である丸に五瓶瓢箪紋を金蒔絵で表しており、後立は銀箔押で「南無阿弥陀佛」と黒漆で書かれています。観音寺は平成二十八年に火災に遭い、兜は翌年度に保存修理を行いました。岡崎市指定文化財。

#### 「西光寺資料」

鴨田町の西光寺に伝わる櫓時計・掛軸・古文書等です。櫓時計は平成二十五年に修理され、実際に作動します。古文書は幕末から明治初期に西光寺や隨念寺の住職を務めた隆忍に関するもので、掛軸は知恩院や大樹寺から下賜されたものです。幕末の本山等とのつながりが窺えます。

#### 「兼有太郎右衛門家宗円画像」

兼有は岡崎城下、材木町で江戸時

代に活躍した刀鍛冶です。先祖は美濃国関出身で、兼有には甚太郎家と同家より分かれた太郎右衛門家があり、本図は太郎右衛門家の開祖、孫右衛門（戒名通山宗円信士）の肖像です。所蔵先の井田町の持法院には、「兼有」銘の脇差等も伝来しています。三河刀工の系譜を語る上で重要な資料です。

#### 「春興五十三駄之内 金谷」

葛飾北斎による春興摺物（新年を祝って作られた非売品）です。東海道五十三次の風物と美人風俗の取り合わせで描く全五九図の揃いものうちの一枚ですが、本作品は保存状態も非常に良く、美しい色を保っています。



樹下孔雀蒔絵螺鈿洋筆筒

## COLUMN & TOPIC

### NEW FACE 鏡味千佳

昨年十二月から学芸員として美術博物館に仲間入りしました鏡味千佳（年齢非公開）です。どうぞよろしくお願いたします。ピカピカの一年生と申し上げたいところではありますが、学芸員としては3館目の勤めとなります。前職の名古屋ポストン美術館では、浮世絵を主に担当してきました。当館は、美術だけではなく歴史や民俗の学芸員を有しており、その点は特に今まで経験した館の中でもユニークで、今まで知らなかった世界に触れるのがとても楽しみです。

出身は愛知県なのですが、岡崎については初心者。見るもの聞くもの、食べるもの（！）新鮮で、春の桜や夏の新緑など、これからのベストシーズンに色々より道を先輩職員から教えてもらおうと思っています。みなさま、ぜひオススメの癒しスポットやグルメスポットがあれば教えてください！



鏡味千佳

## 『瀧山寺文書 下』の刊行について

柴田富彦

昨年の『瀧山寺文書 上』に続き、岡崎市史料叢書『瀧山寺文書 下』を刊行します。岡崎古文書研究会の方々をはじめ、多くの方のご協力を得て刊行することができました。

瀧山寺は岡崎市滝町にある天台宗の寺院です。当寺は、朱鳥元年(六八六)に開創し、保安年間(一一〇―一一三)に堂宇が整備されます。中世においては三河守護足利氏、近世においては徳川将軍家の庇護を受け発展します。

今回刊行します下巻には、現存する天保元年(一八三〇)から明治五年(一八七二)までの「年行事記録」三冊を収録しました。「年行事記録」とは、瀧山寺の子院で年行事を勤めた常心院・浄蓮院・観量院・玉泉院・密厳院の五ヶ院が各年毎に書き留めた寺務記録です。

内容は寺領庄屋の交替、難渋者への拝借米、米作・綿作の検見、損所修復と人足調達についての寺領支配に関すること、岡崎藩主や近隣領主の瀧山東照宮参詣についての記述もあります。その他に天保七年(一八三六)に起きた三河加茂一揆についても記されています。幕末から明治へと激動する時代に瀧山寺が綴ってきた記録。そこには、領民に対応する領主としての瀧山寺の姿、

激動を生きる百姓の姿が克明に描かれています。例えば、天保七年の御救米をめぐる寺側と領民とのやり取りの記述(「天保七年年行事記録」)は、加茂一揆が起きた直後とあつて緊迫した様子が伝わってきます。

幕末から明治にかけての瀧山寺の動向と寺領の様相が分かるこの一冊。近世三河地域の寺領支配の実態を紐解く上で欠かせない史料集です。『瀧山寺文書 下』を通して岡崎藩領の世界と違った瀧山寺領の世界を味わってみてください。また、下巻だけでなく三河の中世史を塗り替えた「瀧山寺縁起」や慶長年間の検地帳、瀧山東照宮に関する史料などを収録した上巻も刊行しておりますので上下共にご味読下さい。

往古から続く地域の寺院瀧山寺が紡いできた歴史を『瀧山寺文書』上・下を通して感じてみてはどうでしょうか。



瀧山寺文書 下巻

## COLUMN & TOPIC

## 暮らし展 子ども向けイベント報告

伊藤久美子

収蔵品展「暮らしのうつりかわり」(二月二十六日～三月二十四日開催)では、小学生を対象としたイベントを行いました。

### 【子どもわくわく！教室】

A5判12頁カラー刷りの「わくわく！シート」を無料配布。子どもたちが会場で見つけた道具を見て回りながら、答えをみつけて、楽しく完成させることができ、ワークシートです。わくわく！教室では、担当学芸員のお話を聞きながら一緒にワークシートをやっていきます。と言つても、子どもたちは広い会場を好きなように回りたい、道具を自分で見つけた気持ちでいっぱい。お話は最初だけで、会場に散っていきます。一時間程でワークシートができたなら、記念スタンプを押してもらって終了。子どもたちはスタンプが大好きです。

### 【茶の間シート】

小学生以下の子どもたちへの来場記念として「茶の間シート」を作成し、プレゼントしました。子どもたちはシートも大好き、会場出口で手渡すと大喜び



です。家に持ち帰って楽しんでもらうとともに、小さなお子様連れにも当館を知っていただき、今後も来館いただければと考えました。

### 【茶の間でかるた大会】

展示室に再現した茶の間にあがってのかるた大会。競うかるたは四十年前の「いぬぼうかるた」。ちゃぶ台や火鉢を部屋の隅に片付けて、いざ勝負。最初の内は遠慮がちだった(?)子どもたちも、札を取り進めるにつれ真剣モードへ。ジワジワと円陣が狭まり、身を乗りだしての熱戦を展開しました。たくさん札が取れた子、思うように取れずに悔しい思いをした子。観客の大人たちは応援しながら、童心に帰ったひと時でした。



# INFORMATION

## ■平成31年度企画展

### チェコ・デザイン100年の旅

平成31年4月6日(土)～平成31年5月19日(日)

#### □講演会

①「チェコ・デザインとチェコ国立ブラハ工芸美術館のコレクションについて」

日時／4月6日(土) 午後2時～

講師／ラジム・ヴォンドラーチェク氏(チェコ国立ブラハ工芸美術館主任学芸員)

②「戦前チェコの前衛的なデザイン・その代表作とコンテキスト」

日時／4月20日(土) 午後2時～

講師／ヘレナ・チャブコヴァー氏(博士(美術史)/立命館大学グローバル教養学部准教授)

※講演会共通

会場／当館1階セミナールーム

定員／先着70名(いずれも当日午後1時30分開場・整理券配布)、聴講無料

#### □国際博物館の日

日時／5月18日(土) 先着50名様に記念品を贈呈します。

#### □ギャラリートーク

日時／4月27日(土) 午後2時～

担当／当館学芸員

会場／当館1階展示室

参加費／無料(ただし、当日の観覧チケットが必要です。)

#### □子どもプログラム

親子のためのギャラリートーク

日時／5月5日(日・祝) 午後2時～

担当／当館学芸員

会場／当館1階展示室

参加費／無料(ただし、当日の観覧チケットが必要です。)

会期中はほかに、ぬりえ、チェコ展ちよこつとクイズシートもあります。

#### □岡崎シビックセンター Presents コンサート

「スプリングコンサート 弦楽二重奏による音楽の旅」

日時／4月14日(日) 午後2時～

会場／当館1階セミナールーム

定員／先着70名(いずれも当日午後1時30分開場・整理券配布)、参加無料

## 二つの鬼

二月は鬼に出会うことが多い月である。節分での鬼、豊橋の鬼祭り、そして岡崎の瀧山寺火祭りでの鬼である。豊橋の鬼祭りは安久美神戸神明社と氏子町のまつりとして発展したもので、鬼と天狗のからかい(闘い)で知られている。小麦粉と端切り飴をばらまきながら町に繰り出す鬼のパフォーマンスはユニークである。瀧山寺の火祭りは御存じのとおり、祖父鬼と祖母鬼、孫鬼の三匹の鬼が登場する。夜の暗闇のなかで何人かの人に守られながら、松明の炎とともに本堂の廻りで動きまわる姿には迫力がある。豊橋と岡崎の祭礼での鬼を比較してみるのも一興であろう。豊橋の鬼が天狗に追われて退散することは一見、節分での「鬼は外」の鬼払いを思わせるが、田畑の実りの象徴である小麦粉と飴を撒く姿は五穀豊穡をもたらすものである。瀧山寺でも、孫鬼が大きな鏡餅を持って登場することは同様に豊作を祈願するものである。両方の鬼は、追い払ったり、また追われたりする存在でなく、私たちに豊穡と無病息災をもたらす存在である。鬼のような・・・と表現される怖い存在は身の回りにいるが、ここでの鬼は違う。二つのまつりの鬼には鬼に託す古来からの人々の思いが表現されている。(堀)

## おしゃべり、あれこれ。

### 風景と残像

昨年、数年前に亡くなった祖父の形見のカメラを修理した。祖父が使用していたカメラには、六十年程前に販売されていたアナログ式のフィルムカメラから、電池式のフィルムカメラ、電池式のデジタルカメラなどがあり、カメラの変遷が垣間見えるような集め方をしていた。古いカメラを修理できる店舗を探し、すべてのカメラを持ち込み、修理の可否を尋ねると、祖父が持っていた中で最も古いアナログ式のフィルムカメラだけが修理が可能であった。個人的に、写真という媒体についてはしばしば考えることがある。写真が現像されたとき、撮影者が捉えようとした被写体や視点を、完全に共有することはできないが、現像によって写真の鑑賞者はその片鱗を追体験することができる媒体であると感じている。そのため、祖父が覗いていた風景を少しでも体感したかったというのが、形見のカメラたちを修理に持ち込んだ動機だった。修理を終え、今年の正月、家族の姿を祖父のカメラで写真に収めようと撮影をした。しかし、露光の調節などにまだ慣れていないため、良く撮れた写真は、数枚ほどであった。祖父のカメラに触れたことを機に、今後もフィルムカメラを扱ってみたいと思う。祖父が覗いた風景の残像を求めて。(高)

編集後記 | 平成31年度がスタートしました! トップバッターの展覧会は「チェコ・デザイン100年の旅」。チェコといえば、ドヴォルザークやスメタナ、ヤナーチェクなど音楽の世界でも親しみがある国です。会期中には、岡崎出身の演奏家によるチェコにまつわるコンサートも開催します。どうぞお楽しみに!(鏡味)

表紙図版:パヴェル・ヤナーク《クリスタル型小物入れ》チェコ国立ブラハ工芸美術館蔵



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第78号 2019年4月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA